7/27

鉄人たちの夏

長良川国際トライアスロン 四半世紀

◀3▶

大橋隆義さん(61) 大会実行委員

現役選手ゆえの心配り

現役のトライアスロン選手。第十回まで長良川国際に連続出場。十一回目から審判として携わり、今回は大会実行委員と、ルールを統括する技術代表を務める。大会には全国から選手が集まる。「長良川を好きになって、ぜひリピーターになってほしい」と期待する。

スイム、バイク、ランを組み合わせたトライアスロンは「最も過酷なスポーツ」。真夏の大会は、強烈な日差しと、全身にまとわりつく蒸し暑さとの戦いでもある。

あえて暑さを〝売り〟にする長良川国際で、競技は危険と隣り合わせ。体力の限界に挑戦するアスリートの命と安全を守るため、スタッフと審判のまとめ役として、細心の注意を払う。

大垣市生まれ。幼いころから、川遊びなどで揖斐川に親しんだ。中学時代に水泳と中距離走を本格的に始め、社会人になってからもマラソンの市民大会に出場するなど根っからの運動好き。二十数年前、知人からトライアスロンを紹介され、レース後の達成感と体力の限界を知ることができる競技に魅せられた。年に一度は全国の地方大会に出場を続けるかたわら、審判として競技の普及・振興に力をそそいでいる。

コース説明をする大橋さん。「レース中に審判が倒れられない」と、自身の健康管理も怠らない＝海津市の国営木曽三川公園で

長良川国際には審判約四十人に加え、海津明誠高の生徒や地域のボランティアスタッフら計約二百七十人が参加する。準備は五月ごろから始まり、県をはじめ、愛知、三重の各トライアスロン協会に審判の協力を要請。関係団体との調整や、大会関係者に配る資料づくりなど裏方作業に追われる。大垣市の会社に勤めるが、「休日はほとんどこれでなくなる」と笑う。

大会当日は、いつも午前五時ごろに会場入り。まだ薄暗い会場でコースを入念に見て歩き、流木や砂、石など選手の障害を取り除く。「お金を払って出場する選手たちに、競技に集中してもらうことが一番」。自分自身も現役選手だからこそできる心配りだ。

審判として心掛けているのは、選手に高圧的な態度を取らないこと。「おはようからごくろうさんまで、大会関係者が選手に温かい言葉を掛けることで『岐阜に来て良かった』と感じてもらえるはず。大会での印象がそのまま岐阜全体のイメージにつながるから」

愛着のある競技が愛する郷土で開かれ、今年で二十五回目。「ボランティアや地元の協力があってここまでやってこられた。これからも競技と大会の魅力を伝えたい」と語る。

（川田篤志）